

第 505 号

2025 年 9 月 27 日

土佐のわらべ

オーテピア高知図書館

子どもの本の読書会だより

《第 527 回(2025 年 9 月 11 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:11 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『僕たちは星屑でできている』 マンジート・マン／作, 長友 恵子／訳 岩波書店

9月の課題図書は、『僕たちは星屑でできている』でした。イギリスに住む少女ナタリーと、アフリカの独裁国家エリトリアから逃げ出すサミーの物語です。別々の場所で全く違う生活をしているふたりの人生が徐々に交差していきます。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●途中から結末を知りたくて、我慢しながら読んだ。物語という形になっているが、本当のこと。そして、現実にはもっともっとひどいことが起こっていると思う。考えさせられる本だった。紹介してもらってよかった。

●二人芝居の朗読劇と思って読んだ。難民問題は身近になさ過ぎる。何人受け入れるなどと線引きができる問題ではない。読んで細かいところが少しだけ理解できた。物語としても先行きが明るくない。難民のことを勉強しないといけないと思った。

●フィクションだが、ノンフィクション。エリトリアのことを、本を読むまで全く知らなかった。同じ人間なのに分かり合えない。ハッピーエンドではなかったことに衝撃を受けた。難民問題は遠い話だが、考えさせられた。この本に出合えてよかった。

●読んだ本が、現実社会とどうつながっているか考えることができるのが、読書会の良さ。同じお母さんの姿を見て育った、ナタリーとライアンの違いが繊細に描かれていた。短い言葉で伝えられていて、情景が見える。表現力がすばらしい。

●「0日前」でふたりが交差する。サミーの努力が報われると思っていたので、ショックが大きかった。日本も選挙の争点に外国人問題が挙げられるような国になってしまった。勉強して忘れないこと、少し声に出していくことが、自分にできること。

●他の国と協力しないといけない時代なのに、仲良くできないのはなぜか。切り口や取り方で印象は変わる。両方の立場を考えてから、見るようにしないといけない。正しいことのために声をあげて忘れないといけない。

●エリトリアに住む人たちをどうすることもできないのか。ナタリーとサミーがメールでやり取りするところが今どき。逃げているサミーもスマホは持っている。サミーに助かって欲しかったが、現実はこちらの方が多いのだろう。

●ナタリーとサミーが出会い希望が見えてきたと思っていたので、最後はつらかった。日本も含め、世界で分断が進んでいる。サミーのように、「みんな同じ星屑でできている」と考え、寄り添えるようになりたい。つらいが、子どもたちにも知って欲しい物語。

●心情だけで話が進んでいき、説明がない文章が、最初はしんどかった。クリスマスにサミーが自分とツリーを比べる場面は、頑張っているサミーもいつも前向きではいられないと思った。本当にみんなが星屑でできていると思えるよう、今後に期待したい。

●難民の問題は、人間に対する問題が凝縮している。人間は居場所を見つけるために生きている。自分の身近な人、隣にいる人と話し合っていくことが生きるということ。社会の問題、願いが子どもの本に映し出されている。

●物語の持つ力を感じた。いくらニュースを見ても他人ごとだった難民問題が、この本を読むことで自分に引き寄せられるようになった。視野が狭くなっている自分にとって、良い本との出会いは視野を広げてくれる大切な機会。

次回 10月9日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『古事記物語』 福永 武彦/作 岩波書店(岩波少年文庫)

※申込み・参加費は不要です。